

フロローク

空を覆う雲の、はるか上のほうから、とどろいてくる雷の音に追われながらも、一心にバーベキューコンロの上に竹筒を転がし続ける子どもたち。バーベキューコンロを焼くことの一点に集中した今年のキャンプが終わった翌明けのこと。さくらが突然、「私、ねぶたには行かないから」と言い始めました。すると、待つ



ていた様に、あみとあんちゃんも「私も行きたくない。」と言い出すところから今回の学童の東北旅行は始まりました。『あ、やっと子どもたちに今度の旅行が現実の課題になってきたな。』と感じつつ、子どもたちが自分の気持ちを幅広く選択できるように、『いいんだよ、行かなくても』とさりげなく返してやります。先週までは、キャンプの準備で手一杯。旅行の詳しい日程の説明や、ねぶたのビデオを見せたのもこの時期。旅行に関心がないわけでも、行きたくないわけでもないことは明らかに見て取れます。お母さんに赤ちゃんが生まれそうだったり、お母さんと長く離れていることへの寂しさと不安が強くなったもののように思えました。お母さんたちからも問い合わせもあったので、『出発するまで抱っこするなど、しっかり甘えさせてやって、安心させてください』とお願いしました。さてどうなることやら。さあ、旅の絵日記の始まりです。

08学童の夏

写真絵日記

ねぶたと賢治・東北の旅

8. 1 ~ 4

さあ、出発！

朝、5時半。マイクロバスの周りは、大きな荷物を背負った子どもたちと、見送りの親たちでいっぱい。29人乗りのマイクロに参加者29名。今回は、親や元職員、にしき保育園の二人の保育者、とねっこからもまりちゃんが参加するなど大人が12名。満員御礼状態。1・2年生を3人掛けにし、座席を空けて、荷物を積み込みます。ここで、りょうやが行きたくないといって車から降りてきません。そういえば、昨日から頭が痛いといっていたっけ。まあ無理をすることもないかと『いいんだよ行かなくても』と戻してやります（もちろん本気で）。親も心のどこかで『行ってほしい』と思っていた状態から『本人が決めればいいんだ』というところまで気持ちが落ち着きます。そんなところに、小松原が



保育園から戻ってきて、りょうやの状況を一目で察知し、「行かなくてもいいよ。でも、本当は行きたい気持ちもあるんだよね。」「うん」「じゃあ、誰と一緒にだったらさびしくないと思う?」「うーんと。ふうまならいい。」「そう。ねえ、ふうまちょっと来て。りょうやと一緒に座ってくれる」もうすでにそうまと座っていたふうまは、「うーん、どうしようかな。でも、一緒でもいい気になってきた」これで一見落着。親が自分の気持ちをわかってくれたという安心感で気持ちが落ち着いたところに、絶妙の押し。みんながそろっていけてよかったね。

まずは盛岡へ

青森に一気に行くにはやはり遠すぎるので、岩手県の北部の少年自然の家に宿を取りました。バスは盛岡インターで高速を降ります。せっかく岩手に来たのだから、土地の名物を食べたいと思うのはとねっことしてはごく自然なこと。今回はじゃじゃ麺。幸いにも、にしきの高津さんの弟さんが盛岡にいらっしゃって、その方の紹介で創業の店に劣らない味と評判の店に予約をしてもらいました。それまで時間があるので、岩手県立美術館に行くことに。(今回の旅の特徴のひとつは、毎日温泉、毎日美術館です)この美術館は、とても広々とした芝生の公園の中に置かれた、シンプルな外観の好感の持てる美術館です。展示物も、日本近代洋画の先駆者である萬鉄五郎や、最近とねっこの職員にも人気の高い松本俊介、船越保武など岩手ゆかりの芸術家の作品が見やすく展示されています。子どもたち



はどうかというと、一通りの作品を見てしまうと、外にある小高い丘や噴水広場に興味を移し、小雨の合間を見つけて駆け出していきました。とねっこの子はやっぱり無理をしないんです。噴水広場にみんなではだしになって入り、長旅の疲れを取っていました。

さて、いよいよお目当てのじゃじゃ麺。4号線沿いのお店もすぐに見つかり、予約の席に案内され、注文も済ませます。ほとんどがじゃじゃ麺の中盛り。昔、お金のなかった学生たちに安くて腹いっぱいになるようにと考え出されたものなので、中盛りでも結構な量があります。さて、お味のほうはというと、温めたうどんの麺に肉味噌やきゅうりがのり、かき混ぜて食べます。この肉味噌がなかなかいい味で、全体をいい味に包んでいきます。ほとんどの子が完食。(食べ切れなかった子の分は当然のように志賀の皿に。)そして、ここからがじゃじゃ麺のもう一つのお楽しみ。空いた皿に卵を割り入れ、かき混ぜます。そして、食堂のお姉さんに、「ちーたんたん、お願いします」と大きな声で頼むと、おねえさんはその皿をカウンターに持って行き、ねぎとスープを入れてくれます。これがまたうまいし、おなか完ぺきにいっぱいになります。ああ、満足。志賀はのどまでじゃじゃ麺が詰まってしまうました。またメタボが進むーッ!



今夜の宿は、七百年の伝統のある温泉のすぐ上に。

盛岡の街はさんさ踊りの初日で大混雑。少し時間はかかりましたが、ようやく街も抜けることができ、再び高速をひた走り。目指すは今夜の宿のある二戸市。先日地震の被害が最も大きかった、軽米地区のすぐとなり。でも見た目には平穏な暮らしに戻っていました。予定では宿舎のすぐ下にある金田一温泉のプールで遊ぶことにしていましたが、盛岡で時間を使いすぎて、プールはなしに。早々と夕飯を済ませ、温泉に出かけることに。夕食のとき、たくとの目が涙目に。辺りが暗くなり始めて、さびしくなってきたのでしょうか。すると今回両親が参加してくれていたしゅんぺいが、「泣きたい時は泣いてもいいんだよ」と余裕のコメント。でもその後に、「みんなおんなじなんだから」とフォローも忘れずに。すかさずともみが、「俺もよく泣いてたよ」。



さて、温泉は。七百年続く名湯だそうで、公共のお風呂ながら、とても落ち着いた雰囲気、泉質もよく、何より空いていたのでゆっくりとお湯につかる事ができ、長旅の疲れが取れるようで、子どもたちも満足げでした。寝る前に紙芝居。今回は宮沢賢治の作品を2つ持っていきました。今日は、志賀が一番好きな「どんぐりと山猫」を読みます。談話室で紙芝居をはじめようとする、一緒に泊まっていた、三戸の高校の剣道部のお兄さんお姉さんたちが入ってきました。「あ、紙芝居だ」「懐かしい、久しぶりだよね」。そこで「一緒に見るかい」と誘うと、少し照れながら、素直に子どもたちの横に正座して座ってくれました。そしてとても静かに聴いてくれ、紙芝居が終わると、拍手まで起こったのです。体も顔もいかついけれど、とっても素直な高校生たちでした。夜も騒がずにいてくれて、子どもたちも早めにやすむ事ができました。



2日目。八甲田を越えて青森へ。

朝、5時半、早起きした子から前庭に出し、虫取り、ボール遊びなどで体を動かします。朝食も済ませ、部屋の片付けも終え、大勢の職員に見送られて、バスが走り出します。目指すは青森。そうです。今夜は一番楽しみにしているねぶた祭りに参加し、跳ね回ります。

「うわー、なんじゃこりゃ！」

青森に入る前に寄る所が2箇所あります。ひとつは、十和田市の中心街に、この4月に開館した「十和田市現代美術館」。各部屋が独立して置かれ、通路で結ばれています。部屋に入ると突然目の前に、身の丈4メートルもの大きなおばあさんが立っていたり（手のしわや肌の感じまでとてもリアルで、動き出しても不思議は無いようでした）あみ日く、「このおばあさん、なに怒っているの？」そう、眼光は意外に鋭いの



でした。また、とても不思議な映像を見せてくれる部屋があったり、10cmぐらいの小さな人間が何万も組み合わさったオブジェがあったり。「エー、なにこれ」「ねえ、見て見て」「あれまあ」（どこのおばさん？）と子どもたちも飽きることなく、次々と展示物を見て回りました。野外にも大きなアリや花で形作られた馬が棒立ちになっていたり、とにかく視覚を始め、五感が総動員されるような感覚に、大いに心が躍りました。

日本三秘湯は「極楽、極楽」

注文がなかなか通らず、いらいらした昼食も終え、バスは奥入瀬の入り口を左にやり過ごし、いよいよ八甲田の山を登ります。ここは、日本でも有数の温泉地。酸ヶ湯、つた温泉など有名な温泉がたくさんあります。その中でとねっこが選んだのは、谷地温泉。昔ながらの湯治場で、知る人ぞ知る感じの秘湯です（日本三秘湯のひとつ）。木作りの湯屋にあつ湯、ぬる湯のヒノキの浴槽が2つ。あとは混浴の打たせ湯（女性に人気）があるだけの、素朴という言葉がぴったりの温泉でした。あまりの心地よさに時間を忘れたのか、子どもたちがおやつにぶどうを一房食べ終えても大人たちが出てきません。出てきた面々の顔は「はあー！極楽、極楽」だったことはいまでもありません。



いよいよ青森。ねぶただー！

曲がりくねった山岳道路が広がりのある直線道路になると、遠くに大きな街並みが見えてきました。いよいよ本州の北の果て、青森です。ところが時計を見ると、3時に近づいています。このまま市内を抜けて宿舎に寄っていたのでは、ねぶたの会場に帰ってこれない可能性が高いと思われ（宿舎は街の反対側）、急遽宿舎に電話。ねぶた終了後に宿に入ることにしました。それではまず、ねぶた愛好会のねぶた小屋に行こうということで、バスをアスパム（青森のランドマークの三角ビル）に向けました。アスパムまで後200mもないという路地で突然渋滞に巻き込まれてしまいました。ようやく前に進んだ時、目に飛び込んできた情景は、延々と連なる観光バスの列。まるで城壁のように行く手を塞いでいます。これはだめだと、アスパムと反対方向に進路を切り替え、近くの神社の前で衣装だけを持って下車。すぐに着付けの予約を入れてある呉服店に向かいます。しかし、店舗が思っていたほど大きくなかったため、ここでまた時間をとられてしまいました。幸い、まいちゃんの青森時代の友達のお母さんが子どもの着付けを引き受けてくれたので、何とか全員着付けを済ませることができました。次はねぶたが出発する会場までの移動です。志賀の花笠を目印に最後までついてきたのは子どもたちだけ。大人はどうしたわけか、やや遅れて到着でした。何はともあれ、これでやっと、念願の本物のねぶたの前で跳ねる事ができます。あー、やれやれ！聴けばこの日の人出は42万人だったとか。



三十年連続出場の歴史を持つ、愛好会のねぶた。今年の題材は『韋駄天』。お釈迦様の骨を奪って逃げる鬼を捕まえる場面が、迫力満点に構成されています。そのねぶたを手が届きそうなところから見るとまた伝わってくるものが違います。後ろに回ると、太鼓の打ち手、笛、鉦、の各隊列。その中には多くの小学生が混じっています。お囃子の人たちもねぶたの本番に備え、毎週公園などに集まっては練習を重ねてきています。おかげで今年は前夜祭で愛好会のお囃子は最優秀賞に輝いたそうです。



午後7時。各ねぶたが一斉に動き出します。総指揮者の『それでは元気よく出発しましょう。』の号令に、参加者からいっせいに、『オー！』という雄叫び。つづいて、ねぶたお決まりの「ラッセーラー！ラッセーラー！」『ラッセーラッセーラッセーラー！』の掛け声に、一気に気分が沸騰し、祭りが盛り上がっていきます。最初は何が始まったかとびっくりしていた子どもたちでしたが、経験者のかの、まいや大人たちが踊りだすと一緒になって跳ねだすのに時間は要りませんでした。どの子も大きな声を張り上げ、『ラッセーラー、ラッセーラー』。そして、リズムに乗って体全体で飛び跳ねています。どの子の顔も輝いて見えます。沿道を埋め尽くした観客の中には、興奮して踊っているグループも見られます。でもですよ。観客席を区切るロープのあちらとこちらは別世界。祭を創る側と見る側では、越えることのできない、次元の違いみたいなものを感じます。『これ



これ。これだよなあ。やっぱりここへ来て跳ねなくっちゃ、この感じは味わえないよなあ』と妙に納得して子どもたちを見ていました。疲れては歩き、歩いてはまた跳ね、広い国道に出る頃には子どもたちの跳ね方も堂に入ったものになってきました。国道に出るとねぶたのパフォーマンスも一段と激しくなり、道幅いっぱい蛇行したり、回旋したり、跳ねている跳ね人たちにぶつかるぐらいに迫ってきたり興奮が一段と高くなる場面です。運行のし始めには、列の最後尾で跳ねていた子どもたちが、国道に出るといつの間にか隊列の先頭で踊っています。かずやたく、ともみ、しゅんぺいたちは、見も知らぬ大学生の跳ね方をまねしているうちに、一緒になって跳ねて回っています。それがなかなか様になっているから面白い。(志賀ではもうだめという声も…)まさにねぶたならではのと思われた場面でした。そうまやふうま、りょうやみーちゃん、かいとなどの1年生も、飽きると鈴を拾っていましたが(拾った鈴を沿道の観客にあげるのが面白くて)よく最後まで一緒に跳ねていたと感心しています。ねぶたの運行も最終のコーナーを曲がり、あと200m。いやが上でも盛り上がってきます。ここで跳ねる事が第一の目標で来た、まりちゃんやにしきのひろこちゃんをはじめとした大人たちも最後の力を出し切ろうと張り切ります。そのエネルギーが子どもにも伝わり、まさに、祭りは最高潮。イヤー！燃えました。燃え尽きました。



そのあとは、燃えカスになった体をバスに押し込み、宿へと向かいます。案の定、曲が

る道を1本間違え、宿に電話をする羽目に（下見で宿を確認していたのに）。でも宿の当直の方がとても親切な方で、夜遅くにもかかわらず、快く対応していただき、なんとありがたかったことでした。（今までは、健康ランドなどにごろ寝を余儀なくされてきたのですから。それを思えば布団で寝られるだけで、天国です）

三日目、移動日もサプライズ。

明けて、3日目。今日は、宮沢賢治の生きた街、今も息づく街、花巻への移動日です。燃えカスにはうれしい、おいしい朝食を食べ、宿を後にします。「東奥日報」に、昨日跳ねたねぶた愛好会の記事が載っていたのでお土産に1部買いました。

今日は移動日。しかーし、とねっこの企画はサプライズに溢れています。以前、創風社の千田さんから紹介され、志賀が偶然、記念館の開館初日に訪れて以来、何とかこの絵をみんなに見せたいと、3年間温めておいた企画が、今回やっと実現できました。



記念館は、青森と弘前のちょうど中間、浪岡町のりんご畑の中に小ぢんまりと立っています。作者の名は、**常田健**。10年ほど前に亡くなられた、津軽在住の画家でした。大地主の息子でありながら、働く農民の生活に目を向け、力強い作品を次々に生み出します。つづいて、農民の生活を脅かす自然災害や戦争、基地問題に目を向け、鋭い筆致を見せますが、やがて、穏やかな、淡々とした農民の暮らし、その中で親子の深い愛情を描くようになります。NHKの番組でも取り上げられ、「青森のゴーギャン」として取り上げられていましたが、志賀的には『ここにも賢治がいる』、という感を回を重ねるごとに強くしています。ご覧になった皆さんはいかがでしたでしょうか。まだ見てない皆さん。ぜひ見てください。お勧めです。子どもたちも絵の持っている力を感じたのか、じっと見入っている子、ため息をついている子など、昨日の現代美術館とは明らかに違う反応を示しています。そのあと、大人たちがゆっくり（実にゆっくりと）と鑑賞している間、館長さんが用意してくれたチョークで、道路いっぱい好きに絵を描いていました。かいとやみいちゃんは紙をもらい、館内でデッサンをしていました。



大人数の旅行で困るのが、食事とトイレです。昨日も道の駅にもかかわらず、注文がなかなか通らずに、無駄な時間と神経を使ってしまいました（おかげで、ねぶたが押せ押せになってしまったのですが）。今回も紹介されたのは道の駅。ところがこの道の駅にはなん



と鮮魚店があるんです（下見のときの志賀の朝食の店）。そして隣には、そばやおにぎりの工房まであります。小松原の目が光ります。『志賀さん、お刺身どれくらい頼んだらいい？』それと察知した志賀が店の主人と相談。『そうね、3000円を2皿かな』。そのほかにイカと鯛の切り込みも買い、隣でおにぎりを50個買い込み（買占め）、芝生の広場で昼食会。刺身を取り合うさまは、

戦後の欠食児童さながら。周りは、なんだなんだというようにこちらを見ている。大騒ぎのうちに昼食も終了。じつにとねっこならではの光景でした。

腹ごしらえもすみ、花巻に向かう車内はみんなぐっすり。あんちゃんを”ダシ”にして夜は結構寝られている志賀は一人、それでも干物を噛みながら約 200k をひた走ります。

「下の畑にクリスマス」?

花巻 I.C.を降り、バスはまず花巻農業高校の庭に移築された、「賢治の家」に向かいます。今日は日曜日。今までは、学校の事務室で鍵を管理されていたので、鍵を借りると自由に室内まで見学ができたのですが、最近、外郭団体に管理を委託した為、土日は見学時間が



限られてしまったそうです。それでも建物の外からは中の様子が伺えます。日本一有名?な伝言板の前でクイズの始まり。[この黒板にはなんて書いてあるでしょう?』『エーと、下ノ…ニ…クリスマス』『はい、したノはたけニいりマス』みんな“居”の字が読めずに苦労しています。と、突然あみが、「こま、わかった。

下ノ畑ニ**クリスマス!**」これには参りました。みんなで大爆笑。もう一つ。賢治の家の居間を興味深くのぞいていたゆりが、こまに、「ねえ、あそこに変な事が書いてあるよ。」と床の間の掛け軸を指差します。「ほら、マンジュウサトって何。」そこには、賢治が37年の生涯を終えるときに読んだ辞世の句 2 種が自筆のまま掛けられているものでした。一種は『方十里 稗貫のみかも稲熟れて み祭三日そらはれわたる』二種目は『病^{いたつき}のゆえにもくちんいのちなり みのりに棄てばうれしからまし』ともに、命が尽きることを予感しつつ、長年の賢治の努力が実ったようなその年の豊作を心から喜んで歌ったものでした。漢字が読めるようになったゆりが持てる知識を総動員して読むと、「方十里」は「まんじゅうさと」に読めたのでしょ。おかげで、句の説明をすることができました。

賢治の愛した大沢温泉へ

ここで、明日仕事のあるゆりママと、昨日から体調を崩していたまいのお母さんが、新花巻から新幹線で帰ることに。新花巻の駅まで二人を送り届け、みんなは今夜の宿、大沢温泉に向かいます。花巻の街を抜け、山に向かって登っていきます。やがて人家もまばらになった頃、豊沢川の川辺に立つ大沢温泉に着きました。ここは今でこそ立派なホテルも建

っていますが、賢治が投宿していたはるか昔から、近在の湯治場として有名な温泉でした。子どもたちが泊まるのは 1 泊〇万円もするホテルではなく、自炊部と呼ばれる昔からの湯治場です。本来は、米、味噌を背負ってきて自炊するのですが、さすがに今は食堂もあり、注文すればすぐに食べられます。子どもたちは夕食は食堂でとり、朝は、ご飯味噌汁だけ頼み、納豆、卵、漬物で済ませることにしました。



さて、部屋は、15 年位前に学童が一度泊まったことのある、川治いの大広間 2 部屋。こ

こをどのように使うかで、大論争。結局、部屋は大人と子どもが一つずつ使う。子どもの部屋の中央にシートでカーテンを下げ仕切りを作る。ということで何とか折り合いが付きました。子どもたちは大人に干渉されたくない、大人は最後の夜を楽しみたい、両者の利害が一致した結果でした。



なめとこ山が実際にあった！

夜が明けると、みんなはさっそくまた温泉につかりに行きました。スタンドに給油しに行っていて志賀がいなくても、男の子も自分たちだけで、他に迷惑をかけることもなく、朝風呂を楽しんできたそうです。温泉も4日目になると、実に落ち着いたものです。前にも書いたとおり、朝食はとてもシンプルなものでした。でもこれがとても評判がよく、「今までで一番おいしかった」とお褒めの言葉を頂くくらいでした。実はこれには過去の経験が活かされており、前回泊まったときにも同じメニューがとても好評だったのです。

朝食もすみ、バスに荷物も積み込んで、宿の人に見送られ、大沢温泉を後にしました。向かう先は、今日の目的地『宮沢賢治記念館』とは逆の山の中。豊沢川を遡ること約20分。ダム湖の先の橋の上です。賢治が若い頃、県の依頼でこの地方の地質調査をしていたことがあります。県内の山の中を歩き回り、岩石の標本を採取しながら感じた様々な事が、賢治がたくさんの童話を発想する下地になったと思います。『注文の多い料理店』『樫の木大大学士の野宿』など。そして、この豊沢川の上流域で「なめとこ山の熊」が生まれます。実際には後の研究で、「なめとこ山」はここに違いないとして特定された山ですが、子どもたちは本物のなめとこ山があったと思ったに違いありません。



賢治記念館

花巻の町にはぎんどろ公園、花巻病院の中庭、下根子の羅須地人協会のあとなど、見るべき所がまだまだたくさんあります。が、今回は時間とその必要性から、賢治の生家を外から眺めるだけにとどめ、賢治記念館に向かいます。花巻の町からすると、なめとこ山のちょうど反対側の小高い丘（胡四王山）の上に『宮沢賢治記念館』は建っています。



ここは、宮沢賢治に関するさまざまな資料がジャンル別に展示がされているだけでなく、企画展にも力を入れています。子どもたちは、新しくできた賢治作品を上映するアニメルームに吸い込まれていきます。そこで大人たちはしばしのティータイム。と、そこに、バスガイドさんにつれられてそうま君がベソをかいて入ってきました。駐車場でトイレを済ませた際、全員出たと思っていたら、

障害者用のトイレに入っていたそうま君を見落としてしまいました。ごめんなさい。

スライドの紙芝居に見入っている子。パソコンでお話を聞いている子など様々です。それぞれが、興味に応じて記念館の中を見て歩いています。みんなとても落ち着いたものです。ゆりは昨日の掛け軸を拡大したもののまゝで、こまから詳しい説明をきいていました。

『どなたもどうぞおはいりください』

一通り見終わると、昼食をとるために予約をしていた『山猫軒』へ。入り口や店内にはネコ型の額の中に『注文の多い料理店』の中に出てくる料理店の指示が掲げられ、読んでいるだけで楽しくなります。子どもたちはメニューを見ながら思い思いに西洋料理ではなく、純和風のそばやすいとんなどを注文し、食後には特別にソフトクリームも食べて大満足で、この旅行の最後の食事を終えました。



ここで、保育者(旧も含めて)は席を確保し、今回の旅の感想を出し合いました。若い保育者たちからは、『ねぶたで思いっきり跳ねようと思って参加したけれど、旅行の中で、とねっこがどんなに子ども一人一人の気持ちを大切に思っているのか、子どもを信頼することがどういうことなのか、実際の場面を通して見せてもらったように思う。だから、子どもたちも素直に自分を出している。学童の子どもたちがとってもかわいく思えた。』また、元とねっこの職員からは、「とても元気をもらった。職場の人間関係で悩みもあったが、まずは自分自身がしっかりと立つことが大切なんだと、この旅行を通して感じた。美術館がよかった。」と話してくれました。

この後は、山を下ったところにある「イーハトーヴ館」に立ち寄り、記念のおみやげに絵本を選ぶことにしました。大きな子は新書版の物語を3冊。低学年の子達は好きな絵本を1冊選んで袋に詰めてもらいました。特に人気のあったのは、なんとと言っても今朝見てきたばかりの「なめとこ山の熊」だったことは言うまでもありません。こうして今回の旅の企画もすべてやり終え、再びバスに乗り込みます。後は無事に取手に帰ることを願うばかり。高速に入る頃には、小松原の声も聞こえなくなり、車内はお昼寝モード。みんな疲れているのでこのまま行けるところまで行ってしまおう。ここで、昨日の早朝、青森の朝市(アウガ)で仕入れた珍味が功を奏し、たいして眠気にも襲われることなく、谷和原に着いたのは予定の6時半。外は直前に降り出した土砂降りの雷雨。守谷駅で2人の大人を降ろし、ちょうどタイミングよくかかった絢香の「お帰り」の歌声に乗り取手に入ります。給油をし、駐車場についたのが7時ちょっと回っていたかな。こちらは雨がぼつぼつの状態だったので、急いで荷物を降ろし、挨拶もそこそこにさようなら。なんともあわただしい幕切れとなってしまいました。まあ、子どもたちからいろいろ旅の話を聞いてください。以上、簡単に旅の絵日記でした。とっても盛りだくさんの東北の旅でした。



とねっこ学童 志賀

